主日礼拝説教「わたしに返さないでください」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年9月3日

【旧約聖書日課】箴言　25章2～7節a

2 ことを隠すのは神の誉れ
　ことを極めるのは王の誉れ。
3 天の高さと地の深さ、そして王の心の極め難さ。
4 銀から不純物を除け。
　そうすれば細工人は器を作ることができる。
5 王の前から逆らう者を除け。
　そうすれば王位は正しく継承される。
6 王の前でうぬぼれるな。
　身分の高い人々の場に立とうとするな。
7 高貴な人の前で下座に落とされるよりも
　上座に着くようにと言われる方がよい。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　11章7～15節

7それとも、あなたがたを高めるため、自分を低くして神の福音を無報酬で
告げ知らせたからといって、わたしは罪を犯したことになるでしょうか。8
わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕
するための生活費を手に入れました。9あなたがたのもとで生活に不自由した
とき、だれにも負担をかけませんでした。マケドニア州から来た兄弟たちが、
わたしの必要を満たしてくれたからです。そして、わたしは何事においても
あなたがたに負担をかけないようにしてきたし、これからもそうするつもり
です。10わたしの内にあるキリストの真実にかけて言います。このようにわ
たしが誇るのを、アカイア地方で妨げられることは決してありません。11な
ぜだろうか。わたしがあなたがたを愛していないからだろうか。神がご存じ
です。12わたしは今していることを今後も続けるつもりです。それは、わた
したちと同様に誇れるようにと機会をねらっている者たちから、その機会を
断ち切るためです。13こういう者たちは偽使徒、ずる賢い働き手であって、
キリストの使徒を装っているのです。14だが、驚くには当たりません。サタ
ンでさえ光の天使を装うのです。15だから、サタンに仕える者たちが、義に
仕える者を装うことなど、大したことではありません。彼らは、自分たちの
業に応じた最期を遂げるでしょう。

【福音書日課】ルカによる福音書　14章7～14節

7イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを
話された。8「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも
身分の高い人が招かれており、9あなたやその人を招いた人が来て、『この方
に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかい
て末席に着くことになる。10招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさ
い。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでく
ださい』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すこと
になる。11だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」12
また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すとき
には、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人
たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。13宴会を催
すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見
えない人を招きなさい。14そうすれば、その人たちはお返しができないから、
あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

「さあ、もっと良い席へ」【こども説教のために】

礼拝堂の真ん中、聖壇中央の聖餐卓に、今日は食事の準備ができています。本当は、日曜日の礼拝ごとに、ここには食事の準備がされてよいのですが、わたしたちの教会では、毎月一回だけ、そうしています。ここに用意された食事は、「パンと杯」です。すでに洗礼を受けている人だけが、「パンと杯」を受け取ります。でも、他の人を差別しているわけではないのです。洗礼を受けた人は、この「パンと杯」が主イエスからいただくものだと信じて、受け取るのです。実際には、とても小さな「パンと杯」です。他の人には、もっと十分な大きさがあって美味しい食べ物と大きなカップに注がれた飲み物を、礼拝が終わってから差し上げたいと思います。

この「パンと杯」が準備されない日曜日にも、礼拝堂の真ん中にあるのは聖餐卓です。礼拝に招かれたわたしたちは、食事をする場所に招かれているのです。皆がここに招かれてきました。この食事に招いてくださったのは、天の父である神、そして御子である主イエスです。教会は、主イエスのお手伝いをして、この食事の集まりに招かれてきた皆さんをご案内します。

「さあ、もっと良い席へ」。子どもたちを前に招くのは、そこが一番良い席だからです。主イエスの食卓に一番近い席だからです。ここに用意された「パンと杯」を、いつか必ず受け取るようになってもらいたいからです。

もちろん、そのように招くのは、子どもたちだけではありません。まだこの「パンと杯」を受け取られていないすべての方を、お招きしているのです。

食事の会を催す

わたしが育てられ、神学校に進むまで通った母教会では、当時、聖餐は年に 4 回しか執り行われていませんでした。かつては、日本のプロテスタント教会の多くが、その程度しか執り行っていなかったのです。その代わりなのでしょうか、母教会では、毎週必ず、礼拝後の「ランチタイムサービス」がありました。150 円でカレーライスなどの軽食にありつけるのです。長く女性の副牧師が一手に引き受けて提供してくださっていましたが、隠退されてからは、有志の奉仕チームが続けられていました。わたしが知っているのは 30 年も前のことですが、今でも続けられているのでしょうか。

母教会では、公式かどうかを問わず、食事を一緒にする機会がとても多くありました。クリスマスやイースターの愛餐会はもちろん、中高生や青年たちの行事でも、自分たちで用意した食事を共にすることが、いつも中心にありました。中でも若者たちがいつも楽しみにしていたのは、正月や夏休みに教会員がご自宅に招いてくださる集まりでした。表向きは「祈祷会」という名目でも、その後の食事会が盛大であることを知って、多くの中高生や青年たちが招かれて行ったのです。

そのような「食事の会」を催してくださる家庭が、いくつもありました。会を準備して招いてくださるご家族は、本当に大変だったと思います。わたしの両親もそのような会を開いて、教会の皆さんをお招きしている時期がありましたが、わたしども家族が手伝えなくなると、やめてしまいました。正式な招待状や出欠返信なしに声をかけられた若者たちは、誘い合って、ときには何十人にも膨れ上がりましたが、毎回そうなるとは限らないのです。準備した食事が足りなくなることも、余ってしまうことも、あったでしょう。もちろん、会費を取るような主催者はありませんでしたから、招いた家庭の負担は、はかり知れません。そうだからこそ、わたしは、今さら思うことがあります、もっとお招きに応えておくべきだった、と。

「**宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ**」。そう主イエスがお教えになられることを、そのとおりに実践しようとしていた何人もの先輩方に、わたしは育てられたのだと思います。皆さんの多くも、そのような先達によって育てられてきたのではないでしょうか。「信仰の先達」というのは、ただ人生の先輩かどうかということではないでしょう。主イエスがお教えになられることを、そのとおりに実践してきたということにおいて先立って歩んでくれている人こそ、「信仰の先達」です。その方々が、わたしたちのことを「**お返しができないから**」と言って招いてくださったからこそ、今のわたしたちがあるのです。

「神の国の食事」に迎えよう！

まもなく迎える「敬老の日」にあわせて、主日礼拝の中で「高齢者の祝福」を祈ることを計画しています。その際、おそらく 90 歳以上の方には、子どもたちが分級活動の中で作るささやかな贈り物をお届けできるでしょう。

毎年、子どもたちとこの活動に取り組みながら、思うことがあります。子どもたちは、どんな思いでこの贈り物を用意し、自分の身内でもないご老人にお渡ししているのだろうか、と。「こどもの教会（教会学校）」の奉仕者と話していて、「子どもたちは、いつも大人から与えてもらってばかりなのだから、ときにはお返しをすることを教えることがあってもよいのでは」とおっしゃる方がありました。わたしは、そのとき即座に、「子どもたちにお返しをさせないでください」と応じた記憶があります。

世の中では、贈り物を受けたら、お返しをするのが常識です。贈り物をやり取りし合うことで、良くも悪くも親密な関係を続けるのです。兄弟同士、親類同士、社会的な立場の近い者同士、わたしたちは相互に贈り物をし合うことで、よい関係を保っているのです。どれだけ贈り物をし合うかによって、その関係の深さが決まっていると言ってもよいかもしれません。逆に言えば、贈り物をし合わない人との関係は、希薄なのです。重要でないのです。そのような人は、自分にとって「よい人」ではなく、「どうでもよい人」なのです。数えることもできないほど多くの「どうでもよい人」が周囲に群れをなしていても、それでよいというのが、世の常識かもしれません。

「だから、何かをいただいたら、何かお返ししなさい」と、教会でも教えるべきでしょうか。いいえ、教会で教えなくても、そのようなことは、皆、当たり前にしているのではないでしょうか。それこそ、何十万年、何百万年、ヒトは、そのようにして群れの中で生きてきたのです。

主イエスは、それを否定されているのではないでしょう。ただ、わたしたちは、一歩踏み出すべきなのです。「どうでもよい人」と考えてきた人のことを、そのままにしないのです。自分に**お返しができない**だろう人を敢えて招いて、食事の交わりに迎えるようにと、主イエスは教えられるのです。

この教えを聞いたある人は、思わずこう口にしたそうです、「**神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう**」（ルカ 14:15）。

お返しができないだろう人を敢えて招いて、親しい交わりに迎えてくださるのは、他でもない天の父であられる神なのだと、主イエスはお教えなのです。わたしたちこそ、お返しができないのに、神の国の食事という親しい交わりに迎えられてきたのです。その恵みを与えられてきたのです。

わたしたちは、神にお返しすることはできません。けれども、主イエスと共に、**お返しができない**人を敢えてお招きすることはできるでしょう。